

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

鴉天狗の日常

### 【作者名】

怠惰に取り憑かれし者

### 【あらすじ】

妖怪と言えば妖怪だが人間と言えば人間的な主人公「有川 九郎」の日常を綴った小説です。

シリアス？糞喰らえみたいな感じでやっております（本当は書けないだけです）

皆様の暇潰しになれるよう頑張りたいです。

この小説は鴉天狗の青年による山無し谷無し笑い無し涙無しのだの作者自己満足小説です。 作者は文才が無いので酷い小説になると思いますが、それでも良ければどうぞお付き合ってください。

この小説は小説家になるうにも投稿しております。

## プロローグ

皆様は天狗と言う言葉を知っているだろうか？

おそらく、ほぼ全員の方が知っている又は聞いたことがあると答えるだろう。

では、天狗には種類があるのは知っているだろうか？

そう、天狗にある程度の種類が存在するのだ。

今から天狗の種類について簡単に説明していこう。

まず、大抵の人が天狗と聞いて思い浮かべるのは鼻が長くて顔が赤い天狗であろう。

これは大天狗や鼻高天狗と言われ天狗の中でも最上位に位置される天狗である。

天狗の中でもより強力な神通力を使うとされる。

他には鴉天狗と言われる天狗も存在する。

こちらは小天狗とも言われ、大天狗と言われる鼻高天狗より下位とされる。

実は元々天狗とはこの鴉天狗のことを指しており、大抵皆様が思い浮かべる鼻高天狗は、実は後から有名になった天狗であるのだ。

ちなみに主人公はこの鴉天狗に属している。

後他には川辺に住み着いている川天狗や天狗の中で一番位の低い  
狗寶（白狼天狗）と呼ばれるものもいたりします。

この小説は二番目に説明した鴉天狗の青年を中心とした話になっ  
ております。

「一羽・作れる可愛いって怖くないか？」

「なあ、九郎。この学校の七不思議って知ってるか？」

優雅に学校で朝食のパンを食べようと思っていた俺に話し掛けてきたこの小柄なバカは一北野亮也 キタノリョウヤ 愉快的な俺の学校での知り合いAだ。

「は？そんなのあるのか？」

「ある！」

「・・・らしいんだよなこれが」

「らしいかよ」

「らしいんだよ。あ、そのメロンパン一口くれ」

俺は少しため息をついた後、メロンパンを少しちぎり亮也に渡す。

しかし、窓の外を見ると、結構早く登校したつもりなのに結構みんな来てるんだな。真面目かお前からお疲れ様です。

「で、その七不思議がなんだよ」

「ひらへに・・・」

「とりあえずメロンパン飲み込んでからにしろよ」

まったく、行儀の悪い奴だ

「調べにい・か・な・い・か？」

うん、そう言つと思つてた。勿論俺は・・・

「断る」

「え、なんでだよ面白そうじゃん」

「お前の面白そうは絶対に面倒なことになるだろ。忘れたのか？先週の廃病院の事」

俺は忘れてないぞ。哀れな畑のことは・・・

「過去のこととは気にしない方向で」

いやいや、過去から学べよ。

しかし、もうすぐ予鈴がなる時間だな。案外時間たってたんだな。

「まあ、畑も昨日退院して今日から登校するしな」

「はあ!?あいつ入院してたのか？」

俺、そんなの聞いてないぞ。

「いやいや、ここ最近一週間ほど休んでたじゃん」

「確かに休んでたが、お前にいじめられた事が原因で不登校になった

のかと」

「俺いじめてないよな!？」

「廃病院で畑の肩押したの誰だったけ？」

いやしかし、折れてるとは思ってたけどまさか一週間入院ものだとはなあ

「いやいやいや、あれは事故だって言ってるじゃん？」

「お前・・・人がいじめと思っただらいじめなんだぜ亮也よ。あいつは自殺してない。ならお前はあいつに言うべきことがあるんじゃないか？」

「いや、ちゃんと謝ったからな」

「甘い甘い甘すぎるわっ・・・」回謝っただけで許されるとでも？畑の心がまだ傷付いていたらどうするんだよっ!!」

俺が熱弁（笑）を奮つと亮也は立ち上がり

「九郎。俺！D組行ってくる」

こう言い放って教室から慌てて出ていった。

ついでに言っとくとD組は畑がいるクラスだ。ちなみにここはG組だ

しかし、なんとか七不思議の話をすり替える事ができたな

キーンコーンカーンコーン×2

あ、あいつ遅刻扱いになった・・・

「で、さっきの続きなんだが」

一時間目が終わるとまたもや亮也が話し掛けてきた。

ちなみにあの後、亮也は涙を流しながら帰ってきた。また何かしらの友情イベントがあったのだろう

しかし、この感じは多分さっきの七不思議の話だ。さて、どうしたものか

「さっきの話って？」

九郎ある種の期待を込めて惚けるが

「七不思議だよ七不思議」

九郎はさっきと変わらぬ亮也の発言を聞いた途端ため息をつき首をうなだれる。

「嫌だっけって言うてるだろ。どうせ俺と畑とお前だけだろ？この前の廃病院みたいに三人で行ってもつまらないってなるって」

「・・・人数が居ればいいんだな？」

この時、九郎は墓穴を掘ってしまったと思った

なぜなら、目の前にいる亮也と言う男は人付き合いがいいからだ。

「……まあ、厳密に言うと人だけではないのだが

「くっ……ああ、10人以上な」

「10か……行ってくる」

「おい待て、次はたい」

亮也は九郎が呼び止める暇もなく教室を出ていった。次が体育だと言ったことを忘れて

「ま、いつか」

「おい、九郎。体育遅れるぞ」

「おう、すぐ行くわ」

亮也のことを諦め、九郎は体操着を持って駆け出す

「……はあ、あいつなら集めてくるだろうな」

九郎の喧きは体育へと急ぐクラスメイトの行き交う音にかき消された



「二羽・バスケットボールって突き指量産するよね

あの後、亮也は5分遅れで体育館に入ってきた。

「で、どうなったんだ？人数集め」

頼む集まるな。

「おう、順調だぜ今で俺とお前入れて6人だな」

「北野！遅れてきたうえに、説明中に喋るなっ!!」

「・・・はい」

「ざまあ、先生に注意されやがった。しかし、6人か・・・時間の問題だなこれ。」

「はあ、しかし強制参加か面倒だな。」

「はい、各自二人組作って」

「よし、九郎組もつぜ」

「おう」

「亮也が組もつぜと言ってきたので快く承諾する。まだ話もしないといけないしな。」

「しかし、案外バスケットボールって楽しいんだな。抜いたとき気持ちいいし、シュート決まったら嬉しいしな。」

「コリアア!!そこおおー!誰がシュートしろと言った?パスの練習だっ!!今は…」

ばれて、怒られました。

「うー、なまあww」

お前が1001しようぜって、言ってきたんだからな。

「で、亮也さあ」

九郎は先生があっち行ったのを確認して、亮也に話し掛けた。

「ん、なんだ?」

「七不思議って具体的にどんなのがあるんだ?」

「さあな、俺はあまり知らん」

「は?」

九郎の顔が固まる。それも仕方ない事である。『七不思議を調べに行こうぜ』って言っている奴が七不思議を知らないのでは話にならない。

「マジで?」

「マジで」

なんとという無計画な七不思議調べなのであるうか。しかし、それが亮也クオリティーだと言うことは九郎は知っている。

キーンコーンカーンコーン×2

校内に一時間目授業終了のチャイムが鳴る。

「まっ、いつもなんとかなるだろうぜ九郎」

チャイムと共に九郎の頭のなかで警告音が鳴っていたのは言うまでもないだろう。

ああ、もう春も終わりが

教室から見えるもう散り始めている桜の木を見て俺はそう思う。

「九郎君」

しかし、散り始めているということとはもうすぐ中間テストだな。まあ、まだ簡単だから気にする必要性も感じないがな。

「おーい、九郎君」

それよりもお腹が空いたな飯にしようか。

そう思い九郎は鞆から今朝買ってきたパンとジュースを取り出す。

ちなみに言っておくがまだ一時間目の体育が終わったばかりである

「おーい九郎君。聞こえてるよね」

「ああ、聞こえてますけど何か？と言っかさつきからうるさい」

さつきから目の前にいる人物と視線を合わせないように無視していたが、どう考えても自分が返事をするまで止めないだろうから無視するのを諦めた。

「やっと返事が返ってきたあ。九郎君、無視するなんて酷いじゃないか」

「酷いのは俺が食べようとしてたミニクロワッサンを食べようとしているお前じゃないのか？光ヶ峰」

「ひょんなことないよ・・・食べてなんかいないよ」

彼女はそう言うが明らかに5個入りのミニクロワッサンが九郎はまだ手をつけていないのに一つ消えている。

「まあ、良いんだけどな別に」

「本当に？じゃあ、遠慮なく」

「いやいや、おかしくね」

九郎はすかさずミニクロワッサンに手を伸ばした彼女の手を叩く。

「え？なんで？」

「え？なんで？っていつ言葉が今出てくるのか俺は不思議に思うんだが。てか、お前二つ目食いやがったな！」

ふと、ミニクロワッサンの袋を見てみたらまた一つなくなってたんだが・・・油断していた。

「油断は禁物だよワトソン君。じゃあ、チャイム鳴りそうだし教室に帰るねーバイバーイ」

そう言っただけ彼女・・・一光ヶ峰 紗綾 ヒカリガミネ サヤ は教室から上機嫌そうに去っていった。

後に残された九郎に残ったのは、ミニクロワッサンを盗られた喪失感やまんまと盗られた悔しさではなく・・・

なんで、ワトソン？

という疑問だけであった。

三羽・特になにも出来ないけど交友関係だけ広い  
やつ

「夜の学校……」

……それは昼の学校とは雰囲気を変え、禍々しい者共が歩く恐怖の館へと変貌する。そして、禍々しい者どもに捕まると、ある場所で拘束され、とある呪術により精神を多大に削られることとなるだろう。実際に先人たちも多くの人がこの恐怖の館へ忍び込み、その大半の人が捕まったとか言われている。次にそうなるのは俺達かもしれない」

ひいひい

……今、俺は9人の残念な仲間とともに学校の前にいる。

で、入る前にバカ(亮也)の演説があっただけど……気付いたらただの怪談になってた。

ちなみにさっきのを訳すと、恐怖の館は夜の学校。禍々しい者どもは宿直の教師たち。ある場所は指導室。拘束と呪術は教師による説教と言うところだな。

「よし、今からグループ分けするぞ。男子はこっち(^^)、女子はこっち(^^)だ」

そう言って、亮也は鞆から小さな箱を2つみんなの前へ出す。

10人で一緒に歩くわけにはいかないから、どうやらグループ分けをするようだ。亮也も考えているようだ。

「はい、九郎」

どつやら俺の番が回ってきたようだ・・・どれどれ、1か。

「よし、みんな貰ったな」

そう言っつて亮也は俺達の顔を見回す。

「じゃ、男子代表と女子代表を出してじゃんけんしてくれ」

亮也の言葉に疑問が浮かび上がる。

え？同じ数字の奴と組むんじゃないのか？なんで引かせたんだ？

「北野、同じ数字の奴と組むやつじゃねーのこれ」

「まあ、後で説明するから早く早く」

亮也にせかさされ男子からは畑が、女子からは九郎と同じクラスの宮本という女子が代表になってじゃんけんが始まった。

結果は、12回という長いあいこの後に畑がチヨキで宮本から勝利を納めた。

いやー、無駄にいい勝負だったな思わず見入ってしまった。じゃんけんした二人も涙流して握手してるしな。

「よし、畑が勝ったな」

亮也が浮かべた笑顔を見て九郎は思わず何故かヤバイと感じてしまった。九郎はこの予感が外れることを祈ったが、次の亮也の言葉でその祈りは無に喫することになる。

「じゃあ、勝った男子の番号、1、の方女の子をお選びください」

What? 今亮也、何て言った? 『じゃあ、勝った男子の番号、1、の方女の子をお選びください』っていった?

ここで、九郎は番号を何度も何度も見直した。

しかし、どう見ても、1、にしか見えないではないか。

たて棒だなこれはうん、1じゃなくてたて棒だ、これは。

「1は九郎だろ早く選べよ」

にやにやしながら亮也がせかす。

「そうだ、早く選べよ有川」

「有川、早く早く早く」

「早く選びなよ九郎」

それにつられて男子全員が九郎を急かす。勿論ニヤケ顔で。

「ああ、選んでやるよ。この中で一番の美人を選んでやるよ。お前ら



後悔するなよ」

そう言っただけ九郎は女子の方へ向き直った。こいつ最初は嫌がってたくせにノリノリである

ドサッ

しかし、その瞬間九郎は崩れ落ちる。

「どうしたんだ？九郎」

突然崩れ落ちた九郎を見て心配に思ったのか亮也が声を掛ける。

「駄目だ亮也。女子のレベルが高すぎて俺には選べねえ」

物凄くどうでもいい理由でした。

ちなみに九郎の発言で女子の顔は真っ赤に染まっていた。

「茶番劇はここまでにしといて、九郎早く選べよ」

「おう、早く選ぶわ」

しかし、正直誰選んでも目の保養にはなるんだがなあ。

・・・というか、5対5でこれ擬似合コンじゃね？まあ、いいや。

しかし、目の前にいる女子は

同じクラスの『彼女にしたい女子』第1学年一位（海陽高校新聞部調べ）の久米田さんに

同じく同じクラスの『お嫁にしたい女子』第1学年一位(海陽高校  
新ぶry)の小野田さんと

A組の『疲れた時に癒してほしい女子』総合一位(海陽高ニry)の  
桐谷さんと

D組の『異性と意識しながら付き合える女子』総合一位(海陽こ  
ry)の宮本さんと

E組の『海陽高校ファンクラブ人数』1学年女子一位(海ry)の  
光ヶ峰

という1学年の最高レベルの女子がいるんだけど。

というか、まだ入学して一ヶ月も経っていないのにこのメンバーを  
集めることができる亮也が怖いです。

しかしなあ、選べと言ってもなあ。

俺、光ヶ峰以外あんま喋ったこと無いしなあ、歩いている間気まず  
いのは嫌だからな。

「じゃあ、光ヶ峰で」

「……有川、光ヶ峰さんご指名です」

騒ぐ馬鹿男子4人。ここ学校の前だっただけで忘れてんじゃねえか  
? 二いつら。

「あちゃー、九郎君に選ばれちゃったかー」

そう言いながら俺の方へ近付く光ヶ峰。

「嫌か？じゃあチェンジで」

「チェンジは使用できません」

九郎が亮也に代えてくれるように頼むがその要求は却下される。

「別に九郎君のことは嫌じゃないよ。ただもう少し選ばれるか選ばれないかドキドキしたかったなーって思ってたね」

「じゃあチェンジで」

「チェンジは認められませーん」

だろうな、チェンジされたら俺も困るわ・・・会話に。

「酷いなー九郎君はこんな美人捕まえてチェンジだなんて」

そう言って、光ヶ峰はにやにや顔で更に近付いてくる。

「お前は別に美人ではないと思うんだけどな、俺は」

「えー、それひど」どちらかというと、美人っていうより可愛いって感じだなだな」・・・」

俺がその言葉を言うと光ヶ峰の顔がだんだん紅くなってきた。

「なに口説いてんだよ、九郎。グループ決まったし、今から突入するか口説くのは後にしろよ」

「バーカ口説いてねーよ。第一、俺が光ヶ峰なんか口説こうとしても口説けねーよ。」

自分で言っつて泣けてくるぜ

「はあ、お前ラノベの主人公みたいだな。まあ、いいや。取り合えず一番グループのお前から出発な」

そう言っつて、俺に何かのメモを渡してきた。

「じゃあ、行くか光ヶ峰」

「うん、行こっか九郎君」

俺らは校舎に足を踏み出した。

この後、特に大きな波乱も無いのを知らないで